

いのうえいつべい(社会言語学者)

しまっしまにしまっしま! 再び

この連載をはじめて一年たった。あと残り数回だが、今回は原点に戻ってみようかと思う。「しましまにしまっしま!」だ(原点というほど大した意図はないんだけど)。

このことばの意味は去年の一月号を読んで憶えてくれている人(少ないだろうなあ)とある地域に住んでいるかそこ出身の人たちにしたかぶんわからない。そう、石川県の金沢市あたりの方言で「しま(鱈柄のシマ)にしま(いよ)よ!」という意味だったね。

方言の話をしよう。それも、違う方言の話し手たちが生んだちよつとした笑い話してみよう。方言というのはその地域独特の話し方やことばのことをいうよね。東京近辺で話されていることばはよく「標準語」といわれたりするけど、あれも立派な方言(東京方言だね)。「標準」なんてものはエライ人が勝手にきめたものだ。

おもしろいことが起こるのは、同じように聞こえることばが違う方言では別のことを意味してしている時だ。

その一。九州の多くの地域では、自分のことを「おい」という。東京方言の「おれ」に似てるね。ある時、九州出身の二人が東京のハンバーガーショップに入つて注文をした。Aくんは「Aセット」と注文。横にいたBくんは「おいも」と注文した。Bくんは「ぼくも」というつもりだった。ところがBくんに出されたものはフライドポテトだけだった。

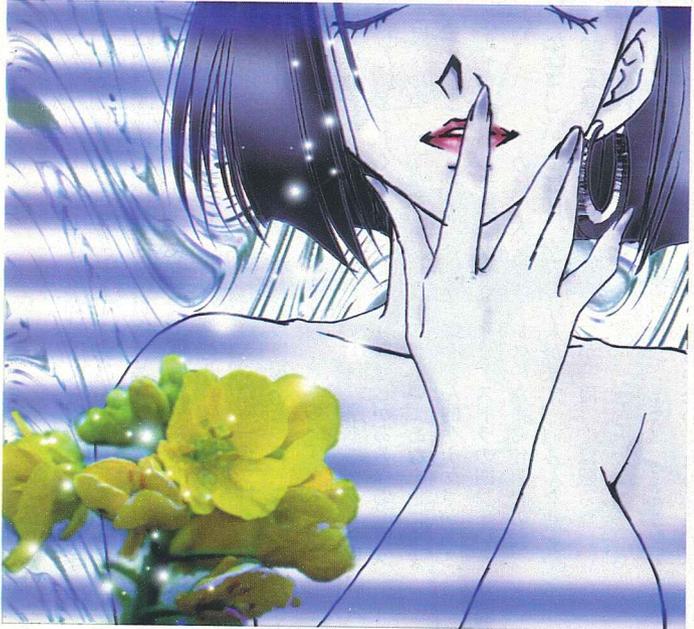
その二。富山県のある地域にいと、「ちゃ」という音がよく耳に入ってくる。「これっちゃ何け?」という言い方をしたりする。「これは(いったい)なんだ?」というくらいの意味だ。ある富山出身の男性がこられた東京のくすり屋さんに買った時の話。彼は絆創膏を買おうと思つて「バンソウウコウつちやありますか?」と店員に尋ねた。「絆創膏は

ありますか」という意味だった。ところが店員の答えは、「そういうお茶はありませんねえ」だった。

こういう話はたくさんある。ある方言のあることばが別の方言では別の意味になつてるわけだね。おもしろいのは、こういうとき自分がその地域の方言じゃない(東京方言じゃない)つてことばにだいたい気づいてないことだ。無意識なのである。

笑い話ですめばいいけど、無意識なだけにこれが結構深刻な問題になる時もある。相手を怒らせたりすることも。特に国際化時代といわれている近頃では、英語の「方言」でこういうことがよく起こる。例えばバキスタンのある地域の人たちの習慣では人に何かを尋ねる時も、下り調子で尋ねたりする。そして英語を話す時も、自分の母国語の習慣が出ちゃうんだね。イギリス人やアメリカ人はそういう時は上り調子という習慣があるから、下り調子でかかれるとムカついたりするわけだ。全然悪気はないんだけどね。

ま、でも世界中にいろんな英語があるつてのは楽しいことでもあるけどね。



illustrated by MIYATA NAOMI